

私の戦争体験 ～あの日は～

長久手市岩作藪田 永田眞璃子さん

当時、私は、名古屋市中区に住んでいて、家族構成は、母、姉、弟、妹そして私の5人だった。

昭和20年5月14日、私が12歳のときだった。名古屋が誇る名古屋城が、アメリカ軍の大空襲で焼失した。爆撃機B29の凄まじい攻撃。轟音と紅蓮の炎が名古屋の街を襲った。燃えさかる火の海。私を含め幼子4人を抱えて、母は逃げるのに必死だった。

死にものぐるいでやっとたどり着いたのは、地元の小学校だった。母が閉ざされた講堂の扉を叩き「子どもだけでも入れてください。助けてー。」と絶叫したが、「ここはいっぱいだ。よそへ行ってくれ。」という返事が返ってきた。いくら哀願しても講堂の扉が開くことはなかった。

心を決した母は、近くにあった防火水槽に防空頭巾をどっぷり浸して、子どもたちに手渡し、「もう何処にも行くところはないんだよ。死ぬときはみんな一緒だからね。」と先に足を進めた。

空爆は、途絶えることなく焼夷弾が滝のように火花を流していた。もう逃げ道はどこにもなかった。小学校の運動場の片隅の塀に身を寄せると、コンクリートの壁は火傷しそうに熱くなっていた。

「怖いー。」口にも出せないほどの恐怖と緊張で、私たちは、四方から母にしがみついていた。どのくらいの時間が過ぎたのだろうか。いつしかあの恐ろしい爆撃音が消えて、夜が明けていた。辺りはもうもうと白煙が立ちこめていて、視界も定かではないなか、消失した無残な名古屋の街の姿が目映った。

行く当てもなく、とりあえず現在の一宮市の田舎の知己を頼って、私たち一家は、一路名古屋駅を目指した。ブスブスとまだ白煙を上げ続ける瓦礫。性別さえ分からない無数の遺体。恐怖の一夜を体験した人々がほとんど無表情で、目的もなくノロノロと歩いていた。この様子は、まさに地獄絵図だった。

やっと名古屋駅に到着し、列車に乗り込むのも戦争だった。我先にと列車の窓から乗り込む人たちの怒号と罵声。私たちは、何度ホームへ放り出されたことか。ほとんど身ひとつで知己のいる田舎に辿り着いた私たち家族だったが、

ここでも戦争が続いていた。母屋から離れた農作業小屋を居宅にあてがわれ、農作業の経験のない私たちは、厄介者扱いだった。そんな差別に泣き、また、貧乏人のくせに女学校へ行っていると陰口を叩かれ、私は、多感な少女時代を暗い気持ちで過ごした。

終戦は、疎開先のこの田舎で迎えた。玉音放送は、母屋から流れてくるのを庭で聞いたが、内容は分からなかった。私は、日本が負けたことを知らされて虚無感に襲われた。

平和な時代であればこそ、人間は他人に優しく接することができる事もでき、心の絆を繋ぐこともできる。もう二度と戦争を起こさせないように切に願いたい。これが八十路を辿る私の切なる遺言である。